

が多く異国の地で言葉も分からず、日本にいる親が恋しく涙の日が続いた。そんなとき、向かいの張さん、陶さんの奥さんが、中国語を覚えてくれたり、買物、石炭の使い方、昭和十九年二月長男（哲邦）のお産に何から何まで、至れり尽くせりの面倒をみてくれた親切は生涯忘れられない。

昭和二十一年一月戦後混乱のさ中に二男が生まれた。引揚げ後二十三年に三男が生まれ、二十八年三月夫は過労のため病死、暗闇のどん底につき落とされた悲しい思い、そのとき、三人の子供こそ、わが家の宝であると言いつつ、生命保険外車の外務員となり、日夜募集活動に専念、三人の子供を養育して二十七年間勤めた会社を退職。その間中国語を勉強して訪中を企画、四十三年間初枝さんの脛の裏に焼き付けて忘れることのできなかつた中国での大恩人、張さん、陶さんを探しつづけていた。

昭和六十三年三月、ついに今は蒙古包頭市張興久に住んでいるとの、張さんからの返信に飛び上がって喜び、同年八月石川県内蒙古日中友好訪問団に参加し、

懐かしの張さん、陶さん夫婦と四十三年ぶりの再会、抱き合って感激の涙にむせび、ありし日のお札をのべ、お互いの健康を喜び合った。

これで中川さんの張さん、陶さんに対する長い間の思いがかない、私の戦後は終わったと言っておられる。

（社）石川県引揚孝厚生同盟

会長 久木 孝作

フィリピンから

孤児となった初恵を連れて

東京都 三橋 真砂

（ローズ・キャサティ）

東京にいる妹禮子にフィリピンの山中での出来事を書いてみないかといわれていろいろ考えた。山の中で避難していて、孤児になった「初恵」を日本に連れて帰ったことが昨日のように思い出された。そして現在では、ルワンダの児童や幼児の悲惨な情況が身にし

みて分かる。

フィリッピンの引揚者の労苦は他の地域からの引揚げとはちよつと違うことはあまり知られていない。フィリッピンでは終戦の前の年、クリスマス前後から一般の邦人が軍の命令で、八カ月の長い間ルソンの山中をさまよったのである。労苦は終戦で始まったのではなく、その前年から起きたということを最初に銘記しておきたい。

砲撃で死んだ兵隊、餓死した一般人、死んだ母親にかじりついて泣いている栄養失調でおなかのふくれ上がった子供たち、一人でうろついている子供たち、五十年前の昔とはいいながら、いまだに脳裏に焼きついている。私の気持ちのわかる人も周りにはいない。時々、あの恐ろしかった過去を思い出して涙を流し、自分自身でなだめることがよくあった。山中の出来事を書き始めたが日本語があまり書けない。一度英語で書いて日本語に書き直す。娘に笑われる。考えて見ると七十年の私の人生のほとんどは外国で生活している。フィリッピンに十五、六年、ドイツに三年、カナダに

来て約四十年、時々、日本から来ている学生たちに、おばさんは旧式ねと笑われる。そしてマダムバタフライの場面を思い出し、自分ながらあきれてしまう。

一九四一年（昭和十六年）十月フィリッピンに渡って四十年間、土木建築請負業を営んでいた父が日本の中学を卒業した兄を連れに一時帰国していた。父は「日米戦争はまぬがれない」と言った。日本の外務大臣がワシントンに行つたが話は決裂、父は私にマニラには行かないですぐ母と弟妹の面倒を見るようにといつて、十一月下旬か十二月初めごろ、だったと思うが、兄とフィリッピンに行つてしまった。不安な気持ちだった。数日後に真珠湾攻撃、父の知人が「現在の日本は勝利におぼれているが、これが敗戦の始まりだ。あまりあちらこちらに手を出しすぎて危ない」と言った。私は日本の将来が心配になった。そのとき、私は十七歳、東京常盤松高女の五年生であった。フィリッピン生まれの私は、英語、フィリッピン語ができる。日本のために何かこの私にも役に立つことができるだろうと陸軍省に行つた。いろいろ私の気持ちを話したら、

係の人は父と兄のことを知っていた。台湾まで行けば通信隊の通訳になれるだろうと話してくれた。私は小さなカバンに身の回りのものをつめて貯金を下ろす。

母にはあまり話さないで東京を後にした。父が出かけてから三週間後であった。汽車で神戸に行き、神戸から貨物船で台北に行く。それから汽車で台南に住んでいた光吉先生を尋ねた。光吉先生はマニラ日本人小学校の校長先生であった。先生は私に東京に帰るようにと言った。先生に、私が台湾に来たこと、元気でフィリピンに行く、と言っていたことを母に知らせてください、と言付けて台南の陸軍、海軍の司令部間を駆けずり回ってフィリピン行きの飛行機を見つけて乗せてもらいたいと頼んだ。新聞社のリポーターたちと陸軍省の参謀と私、乗員は七人でマニラに向かった。途中、ホンコンに立ち寄ったが、飛行機のエンジンがおかしいとのこと、マニラに着かない前に死んでしまうのではないかとの思いだった。一九四二年に一月二日に無事、マニラに着いた。父にしかられたが、私は日本を一人で肩にしょっている気持ちになって緊張し

た。この後、私の山中での苦しい生活が始まるとは思っても及ばなかった。

配属された通信隊にあいさつに行った。「現在、あなたにして欲しい仕事もないから、エンターテイメント部に入って、兵隊たちを慰問してくれ」と言われた。ここで私は小柳流に入会、踊りを習うことにした。「荒城の月」「やつこさん」「娘十六」「梅にも春」を夢中で習った。同時にマニラのホーリゴースト大学に入学した。踊りを習って半年ぐらいで少し踊れるようになったので、週末になると日本から来ていた漫才師、私たちのおどり、素人歌手の出場で兵隊たちを慰問した。マニラに来てから二年ほどは、日本は勝利状態だったので大学に通ったり、踊りを習ったり、通信隊に一日おきに仕事に行ったりで、戦争をちよつと忘れかけたころ、隊の方からの命令で看護婦になる訓練に入る。

夏も終わり秋に入るころ、米軍がルソン島北部に上陸するといううわさがあった。また、不安な気持ちになる。看護婦のトレーニングが激しくなってきた、大学どころではなかった。フィリピンのメイドがだん

だん少なくなる。日本人の家で働いていると米軍が上陸したときに、ひどい目に遭うというのである。軍隊でもフィリッピン人が少なくなってきた。だんだん食料が不足してきたので、通信隊で飼っていた豚を殺すことにした。殺す人を探したが見つからないので、私がすることにした。一度、フィリッピン人の田舎家のパーティーに呼ばれたときに、豚の殺し方を見ていた。それに我が家でパーティーをしたときも、市場から生きた豚を買ってきて、フィリッピン人の手伝いが殺して料理するのを見ていた。この料理はリッチオンバーボイといって豚を丸ごと竹に通し、火の上でぐるぐる回して焼く、フィリッピン特有の最高のもてなし料理である。そのときは、まさか私が豚を殺す役目になるとは夢にも思わなかったが、やればできると思ったのである。係の兵隊は目を白黒、「すごいなあ」と言っていて口をぽっかりあけて見つめている。私の家で働いている二人のお手伝いが豚の内蔵、血、足、しっぽが欲しいといっついて来ていた。豚は全部で五匹、私の指図で用意された。兵隊が豚を一匹ずつ台にのせたの

を殺した。お手伝いの人に望みの部分をあげ、兵隊には毛のとり方を教えて、二時間で全部終わらせた。私自身でも驚いたが、お料理が出来るまでにした。兵隊たちの「あの女を嫁にしたらいつやられるかわからん」という声を後にして私は帰った。

そのころ、父の掛け渡したカバナツワンの鉄橋が米軍の爆撃にあつた（日本軍の南北の連絡をたち切るために）。敗戦の色濃い不安のうちに、一九四四年（昭和十九年）も終わろうとしていた。一般邦人はクリスマスを前後にして軍の命令で山の中に避難した。一九四五年に移動する。三月米軍はルソン島北部に上陸。父の友人は私たちを隠してくれるとのこと、友人は父に「あなたはこの国に随分つくした。キャビテの無線電信塔、カバナツワンの鉄橋、デルカルメンの砂糖工場、マンピシング金鉱山開発、こんな大仕事をした人が山に隠れる必要はない」と言ってくれたが、迷惑はかけたくないので最後の最後までねばって、ついに山の中に避難する決心をした。手伝いの人に帰って来るまで、家に住んでいてくれるようにといっついて四日に山

に入った。父と私は通信隊と共に東南に向かう。イロイロという所でダムの上流を渡る。山に入ったばかりのときは、食料はあるし、皆元気で冗談を言い合ったりして一カ月が無事にすぎた。そのころ、米軍からピラがまかれた。「降参しなさい。東京は爆撃されて、焼け野原になっている。家族の泣き声が聞こえるでしょう。降参しなさい」と書いてある。五月が過ぎて六月の雨季に入る。私たちの通信隊は後退するたびに兵器を失い、食料もなくなった。私も父もすっかりやせてしまった。私はマラリヤになった。病人とおなかのへった人の集まりになった。私は野戦病院に回された。もちろん、父はいつも一緒である。

ある日、日本からの連絡で、また東京がやられたとのこと、母や弟・妹のことが心配になる。その帰り一人の兵隊が、「お願いします。病院まで連れて行ってください。もうこれ以上歩けない」と泣かれては放つてはあげず、おんぶして病院に連れて行ったが、彼は私の背で死んでいた。二、三の兵隊に頼んで死体を埋めた。若い台湾からの少年がいた。十七・八歳だと思ふ。

「お姉さん僕を最後まで見守ってください」と言う。

「元気出してね、もう戦争も終わりに近いから」となだめて夕食を作った。食事が終わると皆ですし屋だの支那料理屋に行った話をして、うとうとと眠りに入ったとき、大きな爆発で飛び起きた。どうした何だと言いながら外に出る。最後まで見守ってくださいといっていた若い少年が、手榴弾で自殺してしまった。父は自分の息子を失ったように悲しんだ。そのころ兄は現地召集されたが、幹部候補生となり内地に配属されていた。次の日、野戦病院回りをして皆をばげました。葉をあげたりお話ししたり……。そのとき、「ゆり子、ゆり子」と叫ぶ兵隊がいた。私はキョロキョロ見回すが女性は私一人である。病院にいた伍長さんが「頼むあの人のために、ゆり子になってあげてくれ」という。私は言われたままにその兵隊のそばに行った。兵隊は、「ゆり子、よく来てくれた。会いたかった」と私にしがみつく。「元気を出して日本と一緒に帰りましょうね」彼は笑顔で「うん帰ろう。会いたかった」と私を抱きしめて死んでいった。伍長は「ありがとう」

と一言。他の兵隊は無言で私を見ている。男泣きに泣いた人もいた。三日続けて毎日一人ずつ兵隊が身近で死んでいった。

翌日、私は食べ物を探してくると出掛けた。一人で山を歩き回る。あまりの衝撃で兵隊の周りにいられなかった。弱ってきた父と町に戻ろうかとも思いながら、ブラブラ捜していたら大きな蛇がとぐろを巻いていた。こわごわそばに行つて調べた。毒のない蛇だと確かめて拳銃で打つ。まず蛇を追いかけた。次は蛇に追われて悲鳴をあげる。私の呼び声で兵隊がとんで来る。蛇は直径十センチ長さ三メートル半はあった。追い掛けたり、追われたりして最後の一発で仕止めた。皮をはがして照り焼きにしたり、雑炊に入れて食べた。おいしかった。それから毎日のように食べ物を捜すけれどもない。それでも野生の果物におつかることもあった。川を見つけた。沿岸に小さな片ばさみの蟹がいた。あまりお腹がすいていたのでそのまま食べた。甘い味かしておいしかった。小さな蟹を袋に入れた。帰りがけに木の芽、雑草のおいもの、味の無いものを

取つてきて雑炊を作る。こんな毎日がつらい。父もますますやつれてくる。

七月に入った。父に、私はこれ以上山にいたくない。ここで死んではならないと話す。父は何も言わない。父の無言はよくわかる。青雲の志を抱いて、この国に来て四十年間かけて築いたものが、眼前から永久に失われる悔しさ、無念さ。父はあのころ、まだ五十五歳の働き盛りであつたが、山中の生活で年を取ってしまった。

話は前後するが山に入る前に私は伍長さんという名前の猿を飼っていた。いつも連れていたが、ある日伍長さんがいない。一生懸命探していたら兵隊が、「貴方におこられると思うが、伍長さんは雑炊にして食べてしまいました」とのこと。私は何も言えなかった。山に避難したとき、通信隊は物を運ぶための馬を二頭持っていたが、一頭は病気になつたのでそのままにしたが、もう一頭は足を打つて動けなくなつたので、私と四、五人の兵隊で殺してうすく肉を切つて塩をかけて乾燥させて蓄えた。どちらも食料が欠乏したために

起きた残酷な出来事である。

一九四五年七月から八月にかけて食料の蓄えはほとんどなくなつた。餓死した兵隊、一般人、特に子供たちの死体があちらこちらに転がっているのを見たとき、もはや一刻の猶予も許されないと決心した。ジャングルを出ることだと。父に「お父さんは何を考えているのか知らないけれど、私は死んでもいいけれど屋根のある場所のふとんの上で死にたい。Statistics (単数扱い) にされたくない。私は米軍に降参するから、無言で私の顔をじっとみつめている父。脱走を決心した私はいらぬものは人に気付かれないように捨てて身軽にした。翌日、父とあるだけのものを料理して御飯はおにぎりにし、二日分の食物を持って兵舎を後にした。私たちは山に入ったときの道を戻るようにした。だれかが木の陰から私たちの行動を見張っている感じだった。見覚えのある川にたどり着いた。父とわずかに残つたものを食べ、また荷物を軽くする。二人の兵隊に出会う。何か食べ物があるかと聞かれて、今調べているからそこにあるものを食べてくれと言って彼ら

がおいしそうに食べているのを見て、覚悟をきめて降参するつもりは嬉しかった。「明日からどうするのですか」「これだけでは一日の分量もないが心配しなくてもいい。明日からは魚でも捕って食べるから」と言つてリュックサックから少し出たものをあげた。

「今夜はここで寝るけれど、あなた方はどうする」と聞かれ父は黙っていた。やつれて元気がない。五十八キロの私も三十五キロで目が出目金の金魚みたいになつた。マラリヤにもやられてつらい。兵隊の質問に対して、「私たちは英語もフィリピン語も話せるので、もう少し上流に上つて町に入るつもりですけど一緒に行きませんか」と私は答えた。兵隊たちの顔色が変わる。一人が「君たちは裏切者だ」という。雰囲気が悪い。私はテントを張つて寝る用意をした。寝るように見せかけて父と川を見つめながら横になつた。空を見上げると三日月で星が出ている。お月様が私たちの唯一の光であつた。

兵隊たちの様子は分からないが気付かれないようにその場所からそーっと音をたてないようにして川に向

かった。川を見てギクリとした。春に渡ったときは川底が見えたのに、雨季の後で水量がずっと増して流れも早い。泳げない私はぞっとした。しかし、父が日本軍か米軍が使用した電信線があるのに気が付いて、これに捕まって渡ろう。ここはダムのすぐ上なので、水の流れは早いし夜なのでこわかった。後で考えるところは一つの罠だったのだと思う。肩のリュックサックはずぶぬれ、私と父の姿はいとも哀れなもの、ぬれねずみ、どうしようかと戸惑っているとき、何かに足がからまった。(後でわかったことだが、鈴がついている綱が川岸に張つてあるので、だれでも捕まってしまうとのこと)。とたんにフィリップスの兵隊が四、五人やって来た。フィリップン語で話す。私はフィリップンの間の子と思われたようだ。私が生まれたときあまり色が黒いので、「浜の真砂」のように白くなって欲しいという父の願いで真砂と名付けたそうだが今でも黒い。私と父は米軍の将校の前に連れて行かれた。

この時期は八月下旬で終戦前なので投降という形である。日本軍の兵力、存在、いろいろ質問されたが、

「私たちは軍人でないので分からない。しかし、後退する度に必要なものはその場に残してきているので、彼らには戦う元気はないと思う」と答えた。その間にフィリップスの兵隊が日本の飯盒で御飯を炊いて、いちごのジャムをかけておなががすいているでしょうと持つて来てくれた。父は食べたが、私はいくらひもじくても食べられなかった。日本兵は必ず甘い物を食べたというのでと笑っていた。そこで一晩泊まった。翌日、男女別の収容のため父と別々になった。元気でまた会いましょうと言って別れた。

こうして捕虜生活が始まったのである。私は婦人と子供たちのいるキャンプに送られた。シャワーを浴びて洗濯をすませた。久しぶりにさっぱりとする。百人近くの人が出たが、だれも知っている人はいない。ベッドが与えられ、時刻は午前十一時を過ぎていた。ガードさんに「お昼はいらぬから寝かせてください」とお願いして横になった。久しぶりのベッドは気持ちがよく、夕食に起こされ食事をすませて、またウトウトとしてしまった。どのぐらいだったのだろうか。夜

中にうめき声のような泣き声がかえりて来たので、まだ山のいるような錯覚を起こし、ベッドから落ちてしまった。夢ではない。だれかが泣いている。声をたどって行く。かわりたくないのか、だれも起きない。暗闇の中で弱い泣き声にたどりつく。子供だった。どうしたのと聞きながら顔をなでるとベットである。すぐガードさんの所にとんで行く。ガードさんがフラッシュを持って来てくれた。これが私と「初恵」との出会いであった。

小さな子供が自分のした下痢の中で泣いていたのだ。ガードは私にフラッシュを渡して、「ついて来い」と言つて子供を毛布に包んで医務室に行き診察台に子供をおいて、医者を呼んで来るからその間に体を拭いておくようにといわれた。私は夢中で子供をきれいにした。汚れているものを取つてあげ、新しいタオルで包み直して、そばにあったアルコールで熱を下げるために体をふいて上げた。医者は私を見て看護婦の経験があるかと聞いたので少しと言葉をにごした。医者は「この子はマラリヤと栄養失調で重態です。ここには

設備がないので困っている。ここにベッドを持つて来るから、この子を見てくれないか。今夜がとても危ない」と私の返事を待つ。「ほかの人たちはどうしたのですか」、「人のことにかわりたくないのです。私としては命令できない……。」「名前は?」「初恵」「両親は?」父親は兵隊にとられ、母親と兄さんは山で死んだとのこと。「私の弟がこの子と同じぐらいです。弟を見るつもりで見ましよう」と私は答えた。医者とガードはホッとした顔で、容態が変わつたら電話するようにと、いろいろ私に指示して出て行つた。「良いことをすれば、良い報いが返ってくる」とか……。このことがキャンプにいた私にプラスになつたと思う。手足は細くおなかだけ大きくふくらんだ三歳ぐらいの女の子初恵は私の看護で四、五日して起きられるようになつて医者に感謝された。このキャンプは臨時で十日したら大きなキャンプに移されたが、私と初恵は医者付きである。新しいキャンプには終戦で山を下りて来た女・子供が既に二千人ほどいた。私はすぐに事務所に送られ、このキャンプに入つて来た人の名前、住所、

年齢、の記録をとった。一週間ほどしたら日本の船会社のセクレタリーであった友人の清田さん（現在サンフランシスコ在住）が来たので、一緒に仕事をしていた米軍に、「あの人はハワイの二世だから私の仕事を彼女に頼んでください」といったところ、清田さんはOKで、すぐ引き受けてくれた。子供連れのやつれた人たちにヘルプするのが私の仕事。初恵は私のそばで遊んでいる。キャンプに入ってくる人たちに初恵を知っている人はいないかと探すが、だれも申し出る人がいない。初恵を一人でおいておくわけには行かない。

事務所で仕事をしていても毎日哀しい思いに出会う。やつれた母親が目のドロンとしたやせた男の子の手を引いて、片手には赤ちゃんを抱いている。私は清田さんに合図をした。赤ちゃんは死んでいて、大分たっている。清田さんは「この赤ちゃん、ちよつと医者に見てもらいましょう。お母さんと息子さんは私についていらつしやい。何か飲み物でも」と赤ちゃんを引き取る。母親は「この子のために私は山の中をさまよって来たのだから元気になって欲しい」と泣く。私は赤ち

やんを抱いて医務室に向かう。母親はわめき出す。医者には、やせこけた死んだ赤ちゃん、泣きさげぶ母親を見て男泣きに泣いた。

八月の半ばごろまでに、約七千人の日本女性と子供がキャンプに入つて来て、手伝ってくれる人も増えて、事務の仕事も落ち着いてきた。私は孤児を集めて幼稚園のまねごとをしていた。

ある日、米軍将校のキャンプキャプテンと呼ばれた彼は、「戦争は終わったので兵隊は帰国する。それで少し貴方方日本人に何かしてもらいたい。初恵のこともある。ガードさんもいる。私を見てあなたにいい仕事が残っているよ」と言う。私たち十五人で台所の仕事をするようになった。七千人の食事の支度、三度、三度毎日うんざりさせられた。しかし、このために私は二カ月ぶりで父に会うことができた。父は別れたときより元気に見えた。それから一週間して、私に待っているいい仕事というのが始まった。献立を作つてどれだけの品物があるか、私は本当のところ驚いた。七千人の食品の量をどうしていいのかわからなかった。

清田さんと二人で迎えに来たジープに乗り米軍の本部に行った。ここで食料の計算を教えてくれて、毎土曜日にリポート、欲しい物、また要らないものを報告するように言われた。私と清田さんは、毎土曜日キャンプから出られるので嬉しかった。こうして私は食物の蓄えてある建物の中の事務所で働くようになったのである。それからの引揚げまでの数十日はキャンプは平凡で、皆の不平を聞いて毎日を過ごした。朝の十時と午後の三時に子供たちにチョコレート、ミルク、クッキーをあげ、歌を歌ったり、遊技をして一、二時間を過すのも日課の一つであった。そのころ初恵が私の顔を恐る恐る見ながら「ママ」と呼ぶので、「だれが私をママと呼びなさいと言ったの」と聞くと「あの人」といって指をさす。「この子のことを知っているの?」「この子のお父さんは戦死して、山でお母さん、お兄さんが死んだのは知っています」「名字は?」「それは聞いていません」「どこの出身?」「よく分からないが沖繩だと思えます」「それならばお姉さんと呼ぶように教えてね、ママでは困るわ」とはいったものの、

また、いつの間には「ママ」になってしまった。大砲の音もしない戦争も終わって皆日本に帰ることにうきうきしている。キャンプ長にお願いして、父の面会を頼む。父に何が欲しいかと聞くと着るものとのこと、私のいる事務所の建物に山のように米軍服があるので、父を一日婦人キャンプの手伝いとして連れて来るから、軍服を一着欲しいと、係の人にお願ひして父の体型に合った服を着せて帰した。そのあと日本の兵隊、一般人が話を聞いて訪ねて来た。軍服は欲しい人にあげようという事で皆喜んだ。

九月の末、キャンプ長に呼ばれた。「まず子供連れの女性を日本に送ることになった。君の名前は三橋でMだから一番最後になると思うが……」と私の顔を見る。「皆と相談した結果、貴女に孤児たちを引き取ってもらいたい。子供たちも貴女になついているし……」私は二、三人なら大丈夫、先に帰してもらえんならばと思つたので、「いいですよ」と答えた。彼は「実は十人、初恵を入れて……」と言いくそうにしている。「初恵だけは身元が分からないが、ほかの子供た

ちは皆名札をつけているから、日本に着けば貴女の義務は終わりです」「日本に早く帰りたいけれど、ちょっと重荷ですね。ほかの人たちはどうなんですか?」「断られました」「OK、だれかしなければならぬのですから引き受けます。船には一番先に乗せてくださいいね」と引き受けたものの心配だった。二、三日して父に会いに行く。「元気でね。私は一番の船で帰るようになったから日本で会いましょう」父は私がMなのになぜ、一番先に帰れるのか不思議がつているので、

「私はキャンプで子供の世話、事務、食事の世話をし、働いたので、そのご褒美なの」と笑顔で言っただけだが、父を残していくことと孤児のことで内心穏やかではなかった。それから間もなく孤児と私は別々に港に送られたが、そこで、またびつくり全部で十八人、初恵が一番小さくて三歳、一番年上が十五歳、キャンプの長はこの大きい人たちは自分のことは一人でできるから、貴女は八歳までを見てくれといつて、子供たちの欲しそうなものをくれた。クレヨン、紙ノート、お菓子など兵隊からのプレゼントであった。

船に乗ってまたびつくり、大勢の人を入れるために船の中は畳が敷いてある。一目見て日本に着くまでが思いやられた。二、三日は海が和んでいて、よかつたが、四日目ごろから船酔いが始まる。フィリッピンを出て一週間の間、子供十八人は全員、ほかの二百人のうち、四分の三は船酔いで寝てしまった。船のゆれ方がひどく皆ごろごろと片方に転がる。今度は反対側に転がって行くという状態は止めようがなかった。船員と私と五、六人の人は皆のよごしたものを掃除しなければならぬ。うめき声、泣き声、船の中は生地獄、山にいた方がまだよかつたと思うぐらいだった。大きい子供は青い顔をして、お姉さんすみませんと言っているけれど動けない。私も船には弱いが寝てはいられない。私の預かった子供はもちろんのこと、母親が寝込んでしまった子供たちの世話を船の中でもすることになってしまった。幸いなことに初恵は一日ねただけで割と元気だった。約十日、生地獄の中で目の回るような忙しさだったが、広島に着く前の日は海もおだやかになりちよつとホツとした。日本にもう着くという

気持ちで青い顔の人たちも元気を出して、身の回りのものを片付け始めたが、十五人ほどはやはり全然動けない。私は十八人の子供たちの身なりをきれいにし、一番年上の子供にこの子供たちを見ていてねと頼んで、今度はまだ動けない人やその子供たちの世話までした。船員さんは荷物をまとめる手伝いをしてくださった。

船が広島に着いた。あの恐ろしい原爆の結果が眼前に広がる。くずれたビルディング、焼けて折れた木、死海の世界を思わせる焼け野原が続き、日本海が見えるようだった。米兵から聞いていたが、こんなにひどいとは思わなかった。先に重い病人を降ろした。広島役所の方はあまり親切ではなかった。彼らいわく、「広島は原爆でやられたんです。病気の人たちを見上げる設備はありませんよ」という。担架でかつぎ出された人々は心配な顔をして「私たちはここで死ぬのですか。あんな苦勞をして日本の地をふんだのに、私はここで死ななければならぬのですか」と泣く。何とも言えない。全部船から降りた。私たちが最初の引揚者、あまりいい感じではなかったが、彼らの気持ち

が分かるような気もする。私たち全員にわずかな金額と汽車の切符が渡された。私は子供たちの名札と名簿を照らし合わせ東北に行く人、九州に帰る人をお願いして、子供たちを連れて行ってもらった。船で世話をしあげたので、皆さん心よく引き取ってくれた。

そこで問題は初恵のこと、「この子の両親は死んで出身地がわからないのですが、どうしていただけますか」と聞いた。それに対して皆私の顔を見つめ、「広島には山のようにみなし児がいる。何もフィリップンから輸入する必要はないのだ」という。「この子のお父さんは戦死したんですよ。輸入品ではありません」彼らはニヤニヤ笑いながら「父なしの娘を連れて来て何言ってるんだ……」、私はあきれ返って開いた口がふさがらない。自分の荷物だけまとめて初恵をおいて広島駅に向かう。私は七人兄弟、もう一人連れて来たかどうか？ 父はフィリップンのキャンプに残っている。東京に帰ったところで明日からどうなるのかと思った。初恵は私の責任ではないと自分に言い聞かせて歩いた。「おくさん」と呼びかけられる。私は知

らん顔して駅に向かう。ほかの人は「三橋さん」と呼びながら私の肩をたたく。理由は分かっているから私は立ち止まらない。一人がやつと追い付いてきて、「お嬢さんが呼んでいますよ。かわいいそうに」と言う。私は足を止めないで早目に歩く。「船であんなに皆の面倒を見て一生懸命お手伝いをしたのに、冷たいところもあるんですね」の声に、私の足は止まった。「あの子は私の娘ではないのです。キャンプに入った日に面倒を見てあげてくれと言われて、三カ月見てあげただけなの」とは言ったものの皆の冷たい目にどうしてよいか分からない。少し考え、私は今来た道を戻った。

初恵が「ママ」と泣いている声が聞こえる。三歳の子供に「私は貴女のママではないのよ」と言ったところで何にも分からない。初恵の小さな荷物を私のものとしてまとめて、初恵を抱いて広島駅に向かう。

広島島の役人たちの声を後にした。あれから五十年の歳月が過ぎたが、彼らの声は忘れられない。せせら笑って、「ひどい女だ、自分の子を捨てる。何という女だ」その声はいまだに私に肌寒さを感じさせる。広島

からの汽車は満員で乗れそうもないほどだった。しかし、初恵のおかげでホームにいた人が中の人に、「子供連れの引揚者をもう二人頼むぞ」、中から「大丈夫子供は窓から、お姉さんは入口から乗車してくれ」と言ってくれたので、お昼の汽車に乗れた。これが今日の最終の汽車とのこと、乗れてよかったといって皆が初恵を見てくれるので気が落ち着いた。最初は初恵が私の子だと思っていられないが、いろいろ説明したらひどい連中もいるもんだと、同情してくれたのでやつと日本に着いた嬉しさが実感できた。母や弟妹の顔も思い出す。広島、京都、名古屋・横浜まで来て私は今度家が来るのか心配になって来た。「どこに行くの?」「品川で乗り換えて渋谷まで」「渋谷ね……あの辺は焼けて何も無いのよ」「テントを持っているのでどこかにねますよ。慣れていきますから」と言ったものの胸はドキドキ。渋谷に着いた。本当に何もなかった。神山の坂まで来たら見覚えのある酒屋さんがあった。入って行くと、「よく帰って来たね。お父さんは?」「元氣。少しおくれるけど……私の家まだあるの?」

「大丈夫」と言われて「初恵ちゃん今夜はちゃんとお布団に寝られるのよ」と初恵に言つて実家に向かった。家は無事にあつた。二、三軒隣まで焼けたが妹や近所の人たちが協力して危いところを食い止めたとのこと。妹・弟がいた。母はいなかつたが三十分ぐらいして外から悲鳴に近い泣き声が聞こえた。酒屋の小母さんに来て母は駆けて来たに違いない。嬉しい家族との再会であつた。

三橋家は一人も欠けず、皆元気で再出発できるのは本当に幸せなことであつた。やせこけておなかだけふくれた小さな女の子を連れて来たわけを家族に説明する。自分と同じ年ぐらいの初恵を皆が大さわざして、何だか除け者になつたようにうらめしそうに弟はしている。見たこともない女の人と小さな女の子は、弟の目から見たらけむたい存在だつたと思う。初恵には母を「この人が今日からママ。私はお姉さんよ」と言い聞かす。彼女は遊び相手ができてうれしそうだつた。

この日は忘れもしない。昭和二十年の十月二十三日である。食料難で大変な上に、母、兄妹弟の七人の家

族のところへ、初恵まで連れて帰つて来たので、私は、すぐにまだ疲れも取れないまま、GHQに出かけて勤めることにした。そして夜はダンサーとして働いた。

初恵は栄養失調の上マラリヤにかかっているので、よく病気になり二度死にかけた。その上、また広島で言われたような嫌なうわさを近所のうるさい小母さんたちにたてられて悲しかった。医者に見放された病状の初恵が死んだら、また皆に悪口を言われるだけだと思ひ、医者に断られても診察室に泊まり込んで看護したこともあつた。初恵が五歳のとき、近所の人が親類で子供のない人がいる。施設でないところで育てられたすれていない子供が欲しいとのこと。私はまだ独身、手放したくはなかつたが、家には同じ年の弟もいる。食料事情もまだ悪い。養女に行つた方が幸せかもしれないと決心した。里心がつくといけないので連絡はないという条件だが、二度ほど逃げ出して大さわざをしたそうだ。

初恵の新しい両親が下関に転勤することになった。ちようどそのころ駐留していたカナダ軍人と結婚して、

カナダに行くことになったので、「初恵に会いたい」とお願いしたところ、おばあちゃんが初恵を連れて来てくれた。女学校の一年生になって、すっかり成長した幸せそうな初恵と再会することができた。私のことを忘れていなかったので嬉しかった。別れはつらかったが主人が友人とジープで品川駅まで送って行くために迎えに来てくれた。初恵とおばあちゃんは下関に帰るため、品川駅の改札に入った。「カナダにいらつしやいね」と私は叫ぶ。初恵はおばあちゃんの手から離れて走って来た。「ママと一緒にカナダに行きたい」と泣き出す。おばあちゃんはおろおろ。駅にいた周りの人たちは涙を流す。主人も友人も男泣きする。おばあちゃんを困らせては駄目よといって、初恵をなだめておばあちゃんに渡す。主人は今でもそのときのことを思い出し話題になる。この事件で「連絡しないでくれ」とさらに念をおされた。私は初恵の幸福を祈り、その年一九五五年の六月主人がカナダに先に戻り、私は十一月日本を後にして、主人のもとへ飛んだ。

一九六二年春、主人はドイツに転勤になった。主人

は僕の祖父はアイリッシュだと英国に行つたとき、アイルランドにも連れて行つてくれた。なかなかロマンチックな国であった。私は結婚したが、子供ができなかったので、主人は養子を取る手続をした。教会の神父さんに会つたりして手続を終わらせ、一九六四年七月サインをしてかわいいアイリッシュの男の子を養子にして、その九月カナダに帰つて来た。一九六七年六月に今度はベトナム系の女の子を養女にして、私の家庭はにぎやかになった。一九六九年の六月から九月まで二人の子供を連れて日本に帰つた。父が病気のため、会いに来てくれとのことだ。このときに初恵にも会うことができた。初恵は結婚していたので、もう連絡はしないという条件は解除になっていた。翌年の昭和四十五年八十歳でこの世を後にした父は、フィリッピンにいたころの夢を追つて他界したと思うと本当に悲しくなる。

二年前の一九九二年五月、主人の望みで韓国と日本に帰つた。主人は目を白黒、四十年ぶりで戻つた私たちの思い出せるところは全然なかった。日本も韓国も

あまりの変化に驚くだけであつた。東京の兄は養女に行つてからの初恵に一度も会つていなかったので、初恵に連絡して兄と一緒に会い楽しい夜を過ごした。初恵は現在、横浜で豊かに幸せに生活をしている。お姉様は命の恩人ですと言われたとき、「ありがとうお姉さんと呼んでくれて……ママでは困つた」と笑つた。初恵は沖繩出身と身元が分かり、おばあさんが尋ねて来たとか。そして初恵も死んだ両親の親せきに会いに沖繩に行つたとか、本当によかつたと思う。

私は、現在カナダのナイヤガラの滝のそばに住んでいる。静かなところである。九十五歳の母も日本から来て私のところに住んでいる。二、三年前まではよくこんな田舎に住めると驚いていたが、このごろは慣れたようだ。私には実子はないが初恵と養子ケブン、養女シーラーの三人の子に恵まれた。私の人生は人の子を育てるようになっていたのだと思う。

ここまで夢中になつて書いてみて胸がすーっとした。五十年間人に話せなかつた私の気持ちをもっと上手に表せたらと思うが、日本語の書けない私にはこれが精

一杯。いろいろ考えるとやはり悲しくて涙がこぼれる。勝てば官軍、負ければ賊軍とはよくいったもの。本当に戦争のないように祈つている。

【執筆者の横顔】

ローズ・キャサディ(三橋真砂)さんは、大正十三年フィリッピン・マニラ市で父信作、母スエの長女として生まれる。

マニラ日本人小学校、常盤松女学校(日本)卒業後、渡比してホーリゴースト大学に学ぶ。長女として六人の妹・弟の面倒見のよい姉である。おしとやかとは正反対、とつぴなことをしてよく人を驚かせていた。

父三橋信作が青雲の志をいだいて比島に渡つたのは、明治四十年十七歳のときであつた。

渡比してさまざまの苦勞の末、内地の早稲田大学の建築の通信教育を受け、土木建築請負業としてフィリッピン全島の開發事業に取り組んだのである。

戦中父は現地事情に詳しいとのこと、真砂は軍政顧問をしていた父の仕事に協力していた。

また保母になって託児、孤児の面倒をみていた。父母を亡くした園児からママ、ママと呼ばれてとまどいもした。

フィリッピンの外地で身寄りのない幼児の実情を知って真砂の活発で正義感あふれる純情な気持ちの中でひとつひとつが深い印象となっていた。

やがて真砂はこの幼児らを連れて引き揚げる。マニラから一緒に乗船し、広島港に上陸して幼児たちを親元に引き取ってもらったが、ただ一人の初恵という幼児だけは引き取る親戚がいないため、やむなく初恵の手を引いて、広島から母と妹、弟の住む東京の渋谷の家にたどりつき、母に事の子細を語る。

家族ともども初恵を引き取り、一緒に暮らし育てて成人させたのである。

現在はカナダのナイアガラの滝のそばで、カナダ人の主人と養子、養女と九十五歳の母まで引き取り幸せに暮らしている。

(出)東京都引揚者団体連合会

理事 大平 礼子